

文教研の葉

2013. 秋
発行・編集
河合文化教育研究所

■ほかの予備校にはない河合塾独自の研究所

予備校にはやや異質な感じがする研究所という名称を持つ「河合文化教育研究所」(通称「文教研」)について簡単に紹介します。

この研究所は、河合塾で学ぶみなさんに、単に受験勉強だけでなく、もっと広い世界に眼を開いてほしい、同時に自分の内面を掘り下げて自分の隠れた可能性を見出してほしい、そのための知的刺激を提供したい、という想いのもとに作られたものです。みなさんが存分に自分の感受性と思考力をはぐくむことが、結果として受験への足腰をも鍛えるだろう、との強い確信があったことです。

一方で、文教研は、著名な思想家や国際的に有名な学者の方々に主任研究員としてお越しいただいています。予備校の中の研究所という特別な場所に、大学にはない新鮮な意味を感じて集まってくださった立派な先生方です。この主任研究員の存在が、文教研に文化的・学問的奥行きを与えています。ほかにも、特別研究員や河合塾講師をしながら研究に打ち込んでいく多くのすぐれた研究員がいます。そうした人々の独自の研究と熱意によって、河合文化教育研究所は支えられています。

■文教研がやっていること

文教研では多くの国際シンポジウムを行ってきました。日仏シンポジウム「青年の現在」を皮切りに、日独シンポ「日独文学者の出会い」、北京大学との10年にわたる日中共同学術討論会「アジアの歴史と近代」、さらに日本のセンター試験と中国・韓国の大学統一入試問題を三カ国語に翻訳し、三カ国の受験生にそれぞれ解いてもらって互いに議論した「日・中・韓の大学入試統一試験を社会的・文化的に比較分析する」という衛星放送での国際シンポジウムなど、枚挙にいとまがありません。そのほかにも、わが国初の精神医学者と哲学者合同の「河合臨床哲学シンポジウム」をはじめとして、公開講座、文化講演会、研究会、河合ブックレットや学術書の出版など、文教研でしかできない独自の活動をたくさん行ってきました。最近では、みなさんに向けて文教研の先生方が熱意をこめて書いた読書案内「わたしが選んだこの一冊」も注目を集めています。

■文教研のめざすもの

これらの活動を通して、文教研では、さまざまなほころびが出てきた近代科学や近代教育の枠組みそのものを、みなさんと一緒にもう一度根底的に問い直そうとしています。とくに(3・11)における近代科学の象徴としての福島第一原発の爆発事故以後、近代の諸価値と原理がいっそう丁寧に考え直されなければならなくなっています。文教研では、こうした大きな問題をも受けとめて、みなさんと考えていきたいと思っています。また、東アジアの領土問題がせりあがってきた中、中国や韓国の研究者や若い人々と東アジアの近代の歴史問題や教育問題を互いに語りあい、相互理解を深めることを通じて、近代の国民国家を超えた東アジアの公共空間をどう創るかということをも考えていきたいと思っています。

この「文教研の葉」は、こうした文教研の願いと意図と活動を、塾生のみならず紹介するために発行するものです。

河合文化教育研究所

国際シンポジウム

- 日独シンポジウム 自己—精神医学と哲学の観点から
- 河合文化教育研究所設立記念シンポジウム 青年の現在(ワリー名古屋)
- 日本の心・フランスの心
- 日中共同学術討論会 アジアの歴史と近代 第1回～第10回
- 廣松渉とマルクス主義哲学・国際シンポジウム
- 日中共同学術討論会 魏晉南北朝隋唐時代の歴史的特質
- 18世紀世界の中のヨーロッパ、中国および日本
- 中・日・韓三国関係と東北アジアの平和的発展について
- 医学的人間学—西歐の主体と東洋の主体「生命論」
- 日・中・韓の大学入試統一試験を社会的・文化的に比較分析する
- 医学における人間
- 東アジア史を問い直す—「戦後50年」を超えて—
- 日本学者研究中国史論著選訳出版祝学術討論会
- 日本とドイツの若者は—いま
- ボンジュール学校・アデュー学校
- 日独文学者の出会い—この激動と変革の時代における文学

シンポジウム・公開講座・セミナー

- 河合臨床哲学シンポジウム 第1回～第12回
- シンポジウム現代中国農民運動の意義—前近代史からの考察—
- 北京大学サマーセミナー
- 倉田令二郎の数学探訪講座
- 文学思想講座
- 河合金曜講座

主任研究員 特別研究員

- 木村 敏 主任研究員
- 中川久定 主任研究員
- 長野 敬 主任研究員
- 丹羽健夫 主任研究員
- 渡辺京二 主任研究員
- 牧野 剛 特別研究員

研究会

- 映画研
- エンターテインメント・メディア研
- 学習デザイン研
- カブリ・ジオメトリ研
- 漢文調読研
- 教育方法研
- 経済研
- 現代史研
- 現代思想研
- 現代社会と教育研
- 高等教育研
- 国語教育の再構築研
- 差別問題研
- 女性論・男性論研
- 初等教育研
- 心身論研
- 身体表現教育研
- 生物学セミナー研
- 世界史研
- 大学基礎準備教育研
- 地域言語研
- ドストエフスキ研
- 内藤湖南研
- 20世紀国際政治史研
- 日韓文化交流研
- 日本近代・思想史研
- 認知と記号研
- 東アジアの歴史と現代研
- 廣松渉研

第13回 河合臨床哲学シンポジウムのご案内

臨床哲学とは何か II

- 日時：2013年12月8日(日)11時～18時
- 場所：東京大学鉄門記念講堂
- 講演：木村 敏(河合文化教育研究所)
「感性と悟性の統合としての自己の自己性—超越論的構想力の病理—」
- 野家啓一(東北大)
「臨床と哲学のあいだ・再考」
- コメンテーター
谷 徹(立命館大)
内海 健(東京義大)
榊原哲也(東京大)
津田 均(名古屋大)
- 司会
鈴木國文(名古屋大)
浜渦辰二(大阪大)



第12回 河合臨床哲学シンポジウム 臨床哲学とは何か

主任研究員の近況



書くことが
考えることになる
木村 敏

最近、日経新聞に五回連載で私についての記事が載った。「こころの玉手箱」という欄である。あるいはお読みくださった方もおられるかもしれない。若いころドイツへ留学したときに向こうではじめて取得した運転免許証(これには30歳のときの顔写真がついていて、不思議なことに現在でもまだ通用する)とか、ハイデガーから直接に手渡された自筆の献辞の著書とか、そういった思い出の品物の写真が紹介されている。その最終回に、去年この「文教研の葉」にも書いたウォーキングの話が出てきて、行き先の喫茶店が写真入りで紹介されていた。それからというものの、その記事を読んだという人がちよちよこの喫茶店を訪れる。先日は浜松からやってきたという人もいたし、京大文学部の名誉教授で私も名前はよく知っている有名な先生も来られた。

しかし夏になるとウォーキングは身にこたえる。リュックでパソコンを背負った重装備ではいつ熱中症で倒れるかわからないから、小ぶりのカバンに文庫本、それに老眼鏡と筆記用具を入れて出かける。最近持つて歩くのはほとんど、私自身が若いころに出した論文集の文庫版である。西田幾多郎の言葉に「書くことが考えることになる」というのがあるのだが、自分がむかしどんなことを考えていたかを再体験したくて、自分の書いた文章に書き込みを入れたり赤鉛筆で熱心に線を引いたりしている。そうすることによって、



日本人の留学
—長州ファイブ—
丹羽健夫

「日本人の留学」について調査し本を書いているが、「長州ファイブ」の物語が面白い。長州ファイブとは、英国に留学したのち、明治18年に最初の内閣総理大臣となる伊藤博文、外務大臣の井上馨、など明治の重鎮五名のことである。なかでも伊藤、井上は留学以前は意外にも尊皇攘夷派の雄で、高杉晋作ら総勢12名とともに英国公使館の焼き討ちに加担している。それがなぜ英国留学かについては、壮大な攘夷が狙いであったという説がある。つまりたかが一人や二人切り殺しても埒が明かない、黒船を退治するには黒船を以てするしかない。つまり英国で海軍を学び、日本海軍を建設するために英国に向ったのである。

しかし途中で立ち寄った上海で、何百艘という艦船群を見てこれは海軍という末梢的な問題ではない。国力の問題である。文化文明の問題であると開眼したという。つまり文化文明を国にもたらすという目的に志を変えたという。攘夷から開国に一旦に変身したのである。しかしこのイギリス行きは鎖国の幕

そのときあと一歩のところまで考えが及ばずに文章化できなかった自分の思想が、何十年かの歳月を経てようやく納得できる形にまとまってきたりする。私がいまなんとか形にしたいと思っているのは、この年末にまた東京で開かれる「河合臨床哲学シンポジウム」の講演である。昨年は鷺田清一さんとの組み合わせだったが、今年の相手は野家啓一さん、ここ数年私と二人三脚でこのシンポを取りしきってくださった哲学者である。お互いに相手が何を考えてそれをどう表現するか判りすぎるほど判っている。それでも何とかして新味を出して行かなくてはならない。そんなことでせつせつと自分のむかし書いたものを読んでいる。

プロフィール

木村 敏(きむら びん)
文教研所長・主任研究員
京都大学医学部卒。
専攻・精神医学、精神病理学。医学博士。
京都大学名誉教授。ドイツ精神神経学会およびドイツ現存在分析学会特別会員。

「あいだ」を軸にした独自の自伝論で内外に大きな衝撃を与え、近年は環境に相対する主体を核とした生命論を展開中。
1981年第3回シボルツ賞(ドイツ)、1985年第1回エプスタイン賞(スイス)、「木村敏著作集」第7巻(2002年度第15回河合塾文化賞受賞)、「精神医学から臨床哲学へ」(ミネルヴァ書房)が2010年度毎日出版文化賞受賞。2011年度京都府文化賞特別功労賞受賞。

著書：「時間と自己」「分裂病と他者」「偶然性の精神病理」「自己あいだ・時間」「関係としての自己」「生命と現実」ほか多数。「木村敏著作集」全8巻。河合文化教育研究所からも「人と人とのあいだの病理」から「こころ・生命」(河合ブックレット)、「分裂病の詩と真実」、中村雄二郎氏との共同監修による思想年報「講座生命」全7巻、坂部恵氏との共同監修による臨床哲学シンポジウム「身体・気分・心」「かたまり」と「つくり」野家啓一氏との共同監修による臨床哲学シンポジウム「空間と時間の病理」「自己」と「他者」を刊行。「河合臨床哲学シンポジウム」を主宰し、精神医学と哲学の諸問題の重要なところでアカチュアルな問題を提出する。

政下では密航であった。露見すれば死を覚悟せねばならない。ロンドンに着いた彼らはロンドン大学のユニバーシティ・カレッジで化学・地学・土木・数理・物理などを学び始める。しかし到着後半年弱のとき、米英仏蘭の四国艦隊による故国長州に対する砲撃と占領の報に接する。長州で攘夷論が大勢を占め、下関海峡を通る外国の船舶を砲撃したことに對する報復である。すでに攘夷の無意味さが骨身に沁みわたった伊藤と井上は、無駄な戦争をやめるよう故国を説得するために日本に向う。

この物語で面白いのは、当時英国までは片道で半年もかかったこと、そして伊藤が現地にはたった五ヶ月ばかりの滞在で、英語で演説できるほど言葉を吸収したことである。

プロフィール

丹羽健夫(にわ たけお)
文教研主任研究員
名古屋大学経済学部卒。
名古屋外国語大学客員教授。
1967年より河合塾勤務。以来一貫してカリキュラム作成、生徒指導、教員確保、生徒募集に従事。進学教育本部長、理事として河合塾のみならず、日本の予備校教育の責任を担ってきた。現在は中等・高等教育問題等の出版、高等学校・大学での講演等を中心に、教育の現場から制度まで教育全般について幅広くメッセージを発信を続ける。現在「日本人の留学」を執筆中。

著書：「愛知の寺子屋」「予備校が教育を救う」「悪問だらけの大学入試」「眠られぬ受験生のために」「親と子の大学入試」(共著)「星の王子・王女たちの留学物語」(監修) ほか多数。

特集 谷川道雄先生

河合文化教育研究所主任研究員の谷川道雄先生が、去る6月7日にお亡くなりになりました。87歳でした。

谷川先生は、一九九四年に河合文化教育研究所に主任研究員としておいでくださいました。ご専門は中国中世史で、この分野の第一人者でしたが、そのご自分の中国史の研究を軸に、文教研では東アジア史や「アジアの歴史と近代」をテーマにした数多くのシンポジウムに精力的に臨まれました。また、研究会の主宰や顧問の任にも就かれてみならず指導され、研究成果の発表やその記録の執筆にもご尽力されました。最近特に現代中国農民運動に深い関心を寄せて、中国農民の真摯な姿に触発されるとおっしゃって、熱意のこもったご研究に邁進されていました。



「中国史研究が単に特定の文化世界を分析するに止まらず、そこから人間存在の普遍性につながる原理を求めるところでありたいとかがね考えています」と、全世界と人類の未来へ向けた人類普遍の広大な視野に立つて考えておられました。

1925年、熊本県水俣市生まれ。京都大学文学部史学科卒、大学院に学びながら、亀岡高校、洛北高校教諭に勤務。その後、名古屋大学、京都大学、京都大学文学部史学科、京都大学文学部史学科を定年退官し、龍谷大学教授、京都大学名誉教授。北京師範大学、武漢大学、北京師範大学客座教授。

【主任研究員会議】

◆文教研では毎年4月に「主任研究員会議」が開かれ、先生方が一年間のご研究と次年度のご計画などをお話しくださいます。谷川先生の現代中国農民運動への研究が一段と深まった2012年7月には「内藤湖南研究会」「東アジアの歴史と現代研究会」共同企画の「現代中国農民運動の意義―前近代史からの考察―」のシンポジウムが開催されました。



発表する谷川先生

◆河合塾京都校の谷川先生の研究室には松葉つえをついて通われていて、最近では耳も遠くなりましたが、主任研究員会議の発表では、時にはユーモアも交えながらなお一層強い精神力でご研究を続ける意欲を語っていらっしやうしていました。

◆レポート報告

谷川道雄

内藤湖南研究会に属する8人のレポーターが、「1過去と現在の対話2過去と現在とを結ぶ方法的概念―農民生活における自立と依存3他者依存から自己依存へ」という意図に沿って各自専門の時代について報告を行った。自画自賛であるが、この3つの意図は、従来の個別研究やシンポジウムには

運動の意義―前近代史からの考察―を三つに総括します。「過去と現在の対話」、これは非常に有名なE. H. カールの言葉ですが、歴史家として、中国史家としてそれをしなげやいけけない。現実実は今日の中国の現実から逃避している研究者が多い。だからこういう対話を試みた。中国農民は自分の土地を耕作して、家族労働で自立した生活を送っています。かつてこれは、国家の奴隷でもなければ、農奴でもありません。しかしながら、農民は自分で完全に自立はできない。略奪や自然災害に対して、国家権力や農民の自立を保証する民間の農民以外の有力者に依存しなければ不可能です。自立と依存という論理的にいえば矛盾した構造のもので、農民にとっては他者に依存することで二千数百年も農民たちは生きてきた。これが二つ目です。そして三番目、現代は過去と違って新しい運動の段階にある。他者依存から自己依存へ。農民の自主的な連帯で、新しい農村共同体を作っていくという理想が何らかのかたちで提示されるべきじゃないかと。

◆谷川先生の「文教研レポート」2008年春号掲載の「自我と研究人生」は、牧野先生に応えたものといえるでしょう。谷川先生は、魏晉南北朝の豪族たちが持つ高い倫理観や民衆のために尽くした具体例を見出して発表しますが、当時の唯物論者の研究者たちから大批判を浴びせられます。ところが「それに関する参考文献の項にはどういうわけか必ず拙著が挙げられている」として「社会の現状の一步先を見つめるのが、真の知識人なのだ、少々叩かれるのは当たり前前のことだ」と語られています。



谷川道雄先生 渡辺京二先生 中川久定先生

◆朝日新聞2010/6/17 渡辺京二 拙著を凌ぐ老学究 いわゆる谷川四兄弟のうち、健一、雁、公彦のお三かたは早くから存じあげていたが、3番目の道雄氏とはなかなか縁がなくて、親しくしていたくようになつてから、まだ10年も経たない。でも、著書は早くから読んでいた。「中国中世社会と共同体」。1976年刊だが、私が読んだのは5、6年のこのことだろう。旗田巍氏の著作などで、中国には村落共同体はないというのが定説だと思っていた私は、道雄さんが提出されている豪族共同体なる概念に意表をつかれた。これは戦乱のうち続くなか農民たちが豪族を指導者に仰いで創り出した共同体であり、その共同性は、豪族のおれを律する倫理の高さによつて担保されているのである。このような共同体の存在を、氏は文献の綿密な読みこみを通して立証する。経済的・下部構造、すなわち階級対立をもつて豪族・農民の関係をとらえようとする戦後歴史学の手法からすれば、何と異端であることか。しかし、ここにはドクマを去つて、歴史の真実の姿に即こうとする、自由で勇敢な試みがあった。

◆研究の礎】 塾生のみなさんに向け主任、特別研究員の

非常に短期的に見た場合に、そういう方向へ農民の運動はほとんど展開していったという事になるかと、極めて怪しい二つの原因があります。一つは権力が、農民が世界を自主的に作っていくことを非常に嫌うんですね。どうしても自分たちが干渉する。そういう外からの圧迫。それからもう一つは農民の自覚の足りなさ。農民はやはり自らの利益というものを考える。たとえば、若し農民が都市のきれいな生活に慣れていく。これは生活の必然から来ているわけで、これを非難する理由はどこにもないわけですが、その中で、非常に精神の荒れ果てた農村の空洞化、空心村が至る所に生まれて農村は壊滅していく。中国の農民が自主的に自分たちの世界を作っていく営みは一体どうなっていくんだらう。農村はいかにあるべきかという論を立てる人が非常に少ない。また、知識人たちがそれを希望していてもちゃんと実証的に調べている事例がない。

◆谷川先生の「自我と研究人生」2008年春号掲載の「自我と研究人生」は、牧野先生に応えたものといえるでしょう。谷川先生は、魏晉南北朝の豪族たちが持つ高い倫理観や民衆のために尽くした具体例を見出して発表しますが、当時の唯物論者の研究者たちから大批判を浴びせられます。ところが「それに関する参考文献の項にはどういうわけか必ず拙著が挙げられている」として「社会の現状の一步先を見つめるのが、真の知識人なのだ、少々叩かれるのは当たり前前のことだ」と語られています。

この意識はずっと続いて今日に至っている。魏晉南北朝の史書の錯雑した記事の林の中に、ちよと埋もれた古代遺跡のように、一つの世界が透けて見える。遊牧系種族が華北で興亡をくりかえし、漢族政権は長江流域に亡命して今の南京を本拠とした。加えて各地には盗賊団の横行・掠奪がある。凶作による極度の食糧不足は、人が人を殺して食うという人倫上の最悪状態さえ現出した。この極限状況を人びとはどう生きたか。人間同士が団結するより他に道はないのである。その中心になつて指導したのは、知識と道徳をみがき、資産家でもあるその地方出身の豪族たちであった。彼らはバラバラになりがちな民衆を統合して、地域を防御し、生産を確保することにつとめた。ひどい飢饉のときには、自家備蓄米を放出して、窮民を救済した。こうした私欲を捨てた行は民衆を感動させ、団結力はいよいよ強まった。魏晉南北朝は宗教の時代でもある。儒教の仁義、道教の無私、仏教の慈悲が交り

あつて、人びとを精神的に支えた。私はこうした人びととの団結した関係を、一種の共同体社会と考えた。しかし、豪族は民衆を苦しめるものという固定観念をもつ研究者たちには私の構想が気に入らず、学界ですさまじいパッシングを浴びせられた。それでも私は自説を変えなかつた。歴史学者は自分の主義主張より、史書の記述の事実の中から必然的に導き出される論理を把握しなければ、学問のための学問に終わってしまうだろう。人類が苦難の中を生き抜いてゆくためには、個人の障壁を越えて互いに連帯しなければならぬ。私はその実例を魏晉南北朝時代に見て、そこからこの時代の歴史をえがいた。(中略)

◆谷川先生と渡辺先生】 河合文化教育研究所研究員として同席されるようになり、以来おふたりは親交を深めてこられました。

◇渡辺先生への私信

谷川先生の中国中世の共同体への関心と、渡辺先生がごだわる近代日本における共同体への関心は、事実や事例から歴史を読み解き人間が生きてきた歴史世界を考えたというお二人に共通する姿勢です。谷川先生が「最近の中国農村についていろいろ考えられる興味深い事件が起きているのでそれに関する資料を一覧に供したいと思います。」と、渡辺先生に私信を送ります。渡辺先生が関わる同人誌『道標』編集部から、その通信をぜひ掲載させてほしいという要請を受けた谷川先生は、さらに詳しい説明を添付して快諾されました。

◇「道標」2012/夏 より抜粋

烏坎村事件と共同体の復讐
この村のコミュニティともいえるべき闘争態勢を組織づけているのが、伝統的な宗族制度であるということ、そしてその闘争のセンターがこの村の廟の建築を模した芝居小屋前の広場であること、この二点に強く魅かれていきます。(中略)

毛沢東はこの宗族組織を根拠にした族権の撲滅を計ったのですが、それは脈々と生き続け、それが今回の土地奪還闘争の組織基盤となったのですから、そしてその原因は共産党の汚職にあるのですから、歴史は本当におもしろいです。私はかつて「階級制度によって辱められた共同体の復讐」というようなことを申しましたが(中国中世社会と共同体)、その通りになったのですからオドロキです。

◇次に、谷川先生は「さて、本誌の前号に載せて頂いた広東省烏坎村のたたかひについて、その後さらに考えたことがありますので、少ししつこいと思われるかも知れませんが、補足させて頂こうと思ひ立ちました」と、渡辺先生あてに手紙を出され、この通信「烏坎村事件から連想すること二題」は次の号に掲載されました。

その中の(一)、闘争と観劇)で、烏坎村の闘争センターが芝居小屋前の広場であったことから連想した清朝時代の抗租運動に関

する記録を紹介し、その広場が「彼らの連帯にとって最もふさわしい象徴的地点であった」と位置づけています。(二)、宗族の内なる力)では、「現代の最も先鋭な闘いにおいて、伝統的な血縁団体である宗族が人びとの連帯を支えていたとは思ひも寄りませんでした。しかしその後、中国の学者の農村調査記録を読んで、それがそんなに奇異なことではないことを知りました」と宗族について詳しく論を運びます。

◇「道標」2012/秋 より抜粋

烏坎村事件から連想すること二題

(二)、宗族の内なる力)

そもそも宗族とは何か。宗族の精神とは何か。まずその根源のところから考えてみれば、宗族組織とはもともと同族に対する救済組織です。なぜ同族を救済するかと言え、それは同一の祖先から血を分けた間柄だからです。この組織の中にあつて個人は生きてゆく保証が得られるわけですが、それにはその共通の祖先を祀り、血統を正し、族内の倫理生活を確立しなければなりません。そのために族譜を作つてこれを文字に著し、族田を設けて救済措置(救貧、奨学など)を講ずるわけです。

私がここでとくに注目したのは、族譜についてです。族譜は一族の系譜を載せたものですが、その中には、必ずといってよいほど、族規がつけられています。族規は一族の守るべき規律で、親子・兄弟・夫婦間の倫理は勿論のこと家庭経営のあり方等を明記されています。しかし単に族内のことを述べるだけに止まらず、近隣との和睦を説き、争いを戒める事項が含まれている例が多いことに気づかれます。宗族はたしかに一族の結束した組織ではありますが、地域社会との共存なしには、基本的に生きてゆくことはできません。血縁は人の存在の由来を示すものですが、人が現実生きる場は地縁の世界です。個々人は誰でも血縁と地縁(つまり時間と空間)の交叉するところに生きているわけで、族規を作成した人たちは、このことをよく知っています。内外の倫理を説いたにちがひありません。(中略)

「伝統を単におくられたものと見ず、またそれを近代化に利用し得る手段とのみならず、その意味を根源に立ち返って考えるという、もう一つの立場があるように思ふのですが、いかがでしょうか。この立場に立てば、歴史はすでに経過してしまつた時間ではなく、現代の課題を直接照射してくれる知的体験ということになりましよう。随分回り道をしてしまいました。宗族組織は烏坎村だけでなく、他の地域でもさまざまに活動していることが、おぼろげながら私にも分かってきました。それは一面では、政治の世界に反応して活動する内なる力でもあります。烏坎村の臨時村民代表理事会は、その最も戦闘的な姿であつたと言えましよう。

最後に一言つけ加えますと、民間の自主組織である宗族は、一方で「自主的に」解体してゆく性質も持っています。春節で帰郷した農民工たちが、村祭に参加しなくなり、みこしを担ぐのは老人と子どもばかりという新聞記事を見ました。毛沢東の権力をもつて根絶できなかった宗族共同体が、市場経済によって内側から溶けてゆくのです。

◇さらに「道標」2013年春号に、「湖南省衡陽県農民協会のこと—中国農民運動の最先端」の原稿を寄せますが、それは、烏坎村とは異なる「孤立しがちな村々の維権分子が連帯して、全県にまたがる組織を作り上げた」農民運動の事例でした。その農民協会をまとめたのが彭榮俊という人ですが、その闘いを現在の農民運動の実体の一例として伝えて、引き続き運動を担った人たちの人間像に迫ってみたいと、また新たな研究への意欲を語っていらつしやいます。

◇「道標」2013/春 より抜粋
湖南省衡陽県農民協会のこと—
中国農民運動の最先端
衡陽県農民協会は決して自動的の出来上つた組織ではない。減負代表たちが当局の圧迫に抗しつゝ必死になつて作り上げた集団である。とすれば、これを構成する一人一人にまで降り立つてその精神構造を理解してゆく必要があるのではなからうか。勿論、一時期三千人を擁するといわれたそのメンバーのすべてを考察することはできない。しかしその発起人中の一部の人びとについては、幸いに于建嶸氏による記録が発表されている。その記録に拠つて衡陽県農民協会の領袖たちの人間像に迫つてみたいが、これについては稿を改めなければならぬ。

◇谷川先生が、中国の専門家の中国政法大学社会学院の応星教授と中国北京大學社会学系

の周飛舟教授に、評論「現代中国農民維

護運動の歴史的位

置」を送ると返信が

ありました。

◇「研究論集第10集2012/12 より抜粋

特別寄稿 現代中国農民運動の

性格をめぐつて—中国専門家との交流記録—

応星・周飛舟の両先生は、いずれも私が中国農民の歴史的に一貫した存在様式を自立・依存という図式でとらえたことに対して、全面的な賛意を表明して下さいました。そしてその構想が今日の維権農民運動の意義を考へる上にも有効であるとも評価していただいた。私は自分の拙い考えが、このように両先生の支持を受けたことに対し、限りない激励を感じる。(中略)

私は現代の農民維権運動が農民の他者依存から自己依存へ転換する推進力であると考へるが、両先生はその原則を認めた上で、しかし実際はそこへ容易に向かい得ない現状があることを教示された。実体に触れることのできない私は、この現状を忠実に受けとめなければならぬ。私が自己依存というのは、農民が互いに連帯して地方政府の不法から自己の権益を守り、その自立生活を確保してゆく体制、ただそれだけのことであるが、それが如何に困難なことであるか、改めて運動の内面を知らされた思いである。

◇中国の両先生からの返事に感激された谷川先生は、ついで「ある無量の感激を禁じ得ない」と大学卒業以来の研究生活を振り返ります。魏晉南北朝・隋唐史の研究から豪族共同体論を発表し、自説を堅持してこられたが、中国史の全時代に対して繋がるのかという問題は残りました。現代農民運動を研究する中で視点が独善に陥っていないかどうかという不安を抱えていた時の、中国の専門家からの賛意でした。

◇これは私の長年の中国史研究の終点ともいべきものである。過去と現在を結びつけてトータルにとらえる視点として私が用いたのは、自立・依存というコンセプトであった。私はこれによってかつての豪族共同体論を今日に生かすことができたという感慨をもつ。まことに細々ながら、過去と現在は、私の内面で結びあつたのである。中国の未来は、この現在の動向がそれを決するであらう。

◇谷川先生には、中国史研究者としての面ともうひとつ教育者としての面がありました。教育者としての一面が特に強いのは、高校教諭を勤めた体験があつたことによると言えましよう。先生は「わたしは教室では生徒と同じ目線で見ようとしているんですよ。教壇の上から向かい合っているのでは分らない。だから必ず教壇を降りて生徒の後ろに行つて同じ方向から見るとすよ。」とおっしゃっていました。

◇谷川先生が、中国の専門家の中国政法大学社会学院の応星教授と中国北京大學社会学系

【中国の研究者との交流】

◇谷川先生が、中国の専門家の中国政法大学社会学院の応星教授と中国北京大學社会学系

の周飛舟教授に、評論「現代中国農民維

護運動の歴史的位

置」を送ると返信が

ありました。

◇「研究論集第10集2012/12 より抜粋

特別寄稿 現代中国農民運動の

性格をめぐつて—中国専門家との交流記録—

応星・周飛舟の両先生は、いずれも私が中国農民の歴史的に一貫した存在様式を自立・依存という図式でとらえたことに対して、全面的な賛意を表明して下さいました。そしてその構想が今日の維権農民運動の意義を考へる上にも有効であるとも評価していただいた。私は自分の拙い考えが、このように両先生の支持を受けたことに対し、限りない激励を感じる。(中略)

私は現代の農民維権運動が農民の他者依存から自己依存へ転換する推進力であると考へるが、両先生はその原則を認めた上で、しかし実際はそこへ容易に向かい得ない現状があることを教示された。実体に触れることのできない私は、この現状を忠実に受けとめなければならぬ。私が自己依存というのは、農民が互いに連帯して地方政府の不法から自己の権益を守り、その自立生活を確保してゆく体制、ただそれだけのことであるが、それが如何に困難なことであるか、改めて運動の内面を知らされた思いである。

◇中国の両先生からの返事に感激された谷川先生は、ついで「ある無量の感激を禁じ得ない」と大学卒業以来の研究生活を振り返ります。魏晉南北朝・隋唐史の研究から豪族共同体論を発表し、自説を堅持してこられたが、中国史の全時代に対して繋がるのかという問題は残りました。現代農民運動を研究する中で視点が独善に陥っていないかどうかという不安を抱えていた時の、中国の専門家からの賛意でした。

◇これは私の長年の中国史研究の終点ともいべきものである。過去と現在を結びつけてトータルにとらえる視点として私が用いたのは、自立・依存というコンセプトであった。私はこれによってかつての豪族共同体論を今日に生かすことができたという感慨をもつ。まことに細々ながら、過去と現在は、私の内面で結びあつたのである。中国の未来は、この現在の動向がそれを決するであらう。

◇谷川先生には、中国史研究者としての面ともうひとつ教育者としての面がありました。教育者としての一面が特に強いのは、高校教諭を勤めた体験があつたことによると言えましよう。先生は「わたしは教室では生徒と同じ目線で見ようとしているんですよ。教壇の上から向かい合っているのでは分らない。だから必ず教壇を降りて生徒の後ろに行つて同じ方向から見るとすよ。」とおっしゃっていました。

◇谷川先生が、中国の専門家の中国政法大学社会学院の応星教授と中国北京大學社会学系

【教育者としての谷川先生】

◇谷川先生には、中国史研究者としての面ともうひとつ教育者としての面がありました。教育者としての一面が特に強いのは、高校教諭を勤めた体験があつたことによると言えましよう。先生は「わたしは教室では生徒と同じ目線で見ようとしているんですよ。教壇の上から向かい合っているのでは分らない。だから必ず教壇を降りて生徒の後ろに行つて同じ方向から見るとすよ。」とおっしゃっていました。

◇谷川先生が、中国の専門家の中国政法大学社会学院の応星教授と中国北京大學社会学系

の周飛舟教授に、評論「現代中国農民維

護運動の歴史的位

置」を送ると返信が

ありました。

◇「研究論集第10集2012/12 より抜粋

特別寄稿 現代中国農民運動の

性格をめぐつて—中国専門家との交流記録—

応星・周飛舟の両先生は、いずれも私が中国農民の歴史的に一貫した存在様式を自立・依存という図式でとらえたことに対して、全面的な賛意を表明して下さいました。そしてその構想が今日の維権農民運動の意義を考へる上にも有効であるとも評価していただいた。私は自分の拙い考えが、このように両先生の支持を受けたことに対し、限りない激励を感じる。(中略)

私は現代の農民維権運動が農民の他者依存から自己依存へ転換する推進力であると考へるが、両先生はその原則を認めた上で、しかし実際はそこへ容易に向かい得ない現状があることを教示された。実体に触れることのできない私は、この現状を忠実に受けとめなければならぬ。私が自己依存というのは、農民が互いに連帯して地方政府の不法から自己の権益を守り、その自立生活を確保してゆく体制、ただそれだけのことであるが、それが如何に困難なことであるか、改めて運動の内面を知らされた思いである。

◇中国の両先生からの返事に感激された谷川先生は、ついで「ある無量の感激を禁じ得ない」と大学卒業以来の研究生活を振り返ります。魏晉南北朝・隋唐史の研究から豪族共同体論を発表し、自説を堅持してこられたが、中国史の全時代に対して繋がるのかという問題は残りました。現代農民運動を研究する中で視点が独善に陥っていないかどうかという不安を抱えていた時の、中国の専門家からの賛意でした。

◇これは私の長年の中国史研究の終点ともいべきものである。過去と現在を結びつけてトータルにとらえる視点として私が用いたのは、自立・依存というコンセプトであった。私はこれによってかつての豪族共同体論を今日に生かすことができたという感慨をもつ。まことに細々ながら、過去と現在は、私の内面で結びあつたのである。中国の未来は、この現在の動向がそれを決するであらう。

◇谷川先生には、中国史研究者としての面ともうひとつ教育者としての面がありました。教育者としての一面が特に強いのは、高校教諭を勤めた体験があつたことによると言えましよう。先生は「わたしは教室では生徒と同じ目線で見ようとしているんですよ。教壇の上から向かい合っているのでは分らない。だから必ず教壇を降りて生徒の後ろに行つて同じ方向から見るとすよ。」とおっしゃっていました。

◇谷川先生が、中国の専門家の中国政法大学社会学院の応星教授と中国北京大學社会学系

【谷川先生が選んだ図書】

河合文化教育研究所では2010年から推薦図書「わたしが選んだこの一冊」を発行しています。

谷川先生は、無教会主義で非戦論をとなえたキリスト教徒・内村鑑三の著書を2度推薦されました。「代表的日本人」では、本書が英語で書かれたのは、キリスト教国でない日本にも、世俗のキリスト教徒などには及ばない、キリスト教的精神をもつた人物が存在したことを、世界の人間びとに知らしめるためであつたという。彼のいうキリスト教的精神とは何か。財産や地位や名声などを省みず、つまり自分一身の利益を捨て、人びとの為に献身的に働いて一生を送つた、その純粋な人間の魂のことである。

と解き、「後世への最大遺物 デンマルク國の話」では、何の特別な能力もない平凡な人間が、自分の信ずる道をひたすらに歩み、その精神が他人にも伝わつてゆく、これこそ「後世への最大遺物」だと説くのである。と送るべき人生について教示されています。

中川裕の「アイヌの物語世界」では、アイヌの人たちにとって、人間を除く自然界はすべて「カムイ」で「人間にない力」をもつたものという意味であり、この両世界は対等の関係であり、これこそまさに「自然との共生」である。今年2013年はカトリック信者・遠藤周作の「イエスの生涯」で、いじめに苦しんで命を絶つた中学生の世に存在した痛ましい選択も避けられたのではないかと—そんな人がこの世に存在した、それがイエスだということである。

と紹介しています。こういつた本の選択にも谷川先生の、人と人との共生、人と自然との共生という教育観がうかがえます。

◇谷川先生のあくなき研究への情熱と次世代へ託す思いに強く打たれました。長い間本当にありがとございました。(編集 文教研 東京)

◇谷川先生が、中国の専門家の中国政法大学社会学院の応星教授と中国北京大學社会学系

の周飛舟教授に、評論「現代中国農民維

護運動の歴史的位

置」を送ると返信が

ありました。

◇「研究論集第10集2012/12 より抜粋

特別寄稿 現代中国農民運動の

性格をめぐつて—中国専門家との交流記録—

応星・周飛舟の両先生は、いずれも私が中国農民の歴史的に一貫した存在様式を自立・依存という図式でとらえたことに対して、全面的な賛意を表明して下さいました。そしてその構想が今日の維権農民運動の意義を考へる上にも有効であるとも評価していただいた。私は自分の拙い考えが、このように両先生の支持を受けたことに対し、限りない激励を感じる。(中略)

私は現代の農民維権運動が農民の他者依存から自己依存へ転換する推進力であると考へるが、両先生はその原則を認めた上で、しかし実際はそこへ容易に向かい得ない現状があることを教示された。実体に触れることのできない私は、この現状を忠実に受けとめなければならぬ。私が自己依存というのは、農民が互いに連帯して地方政府の不法から自己の権益を守り、その自立生活を確保してゆく体制、ただそれだけのことであるが、それが如何に困難なことであるか、改めて運動の内面を知らされた思いである。

◇中国の両先生からの返事に感激された谷川先生は、ついで「ある無量の感激を禁じ得ない」と大学卒業以来の研究生活を振り返ります。魏晉南北朝・隋唐史の研究から豪族共同体論を発表し、自説を堅持してこられたが、中国史の全時代に対して繋がるのかという問題は残りました。現代農民運動を研究する中で視点が独善に陥っていないかどうかという不安を抱えていた時の、中国の専門家からの賛意でした。

◇これは私の長年の中国史研究の終点ともいべきものである。過去と現在を結びつけてトータルにとらえる視点として私が用いたのは、自立・依存というコンセプトであった。私はこれによってかつての豪族共同体論を今日に生かすことができたという感慨をもつ。まことに細々ながら、過去と現在は、私の内面で結びあつたのである。中国の未来は、この現在の動向がそれを決するであらう。

◇谷川先生には、中国史研究者としての面ともうひとつ教育者としての面がありました。教育者としての一面が特に強いのは、高校教諭を勤めた体験があつたことによると言えましよう。先生は「わたしは教室では生徒と同じ目線で見ようとしているんですよ。教壇の上から向かい合っているのでは分らない。だから必ず教壇を降りて生徒の後ろに行つて同じ方向から見るとすよ。」とおっしゃっていました。

◇谷川先生が、中国の専門家の中国政法大学社会学院の応星教授と中国北京大學社会学系



長野敏先生

丹羽健夫先生

木村敏先生

私の近況

渡辺京二



試行錯誤のあとを示すものになってくれ
るかも知れない。
三冊とも、以前の
仕事をまとめたもの
だし、たいして思考の
進展がないのは少し
残念。

今年三冊本を出すことになる。一冊はこれまで書き溜めた石牟礼道子論を集めたもの。『もうひとつのこの世』というタイトルで、六月に弦書房から出た。彼女の『天湖』というとても風変わりな小説について、私なりの論を書きおろして収録できたのが何よりだった。

二冊目は熊本大学その他で行なった講演五本を取ったもので、「平凡社新書」の一冊として十月に出る予定だ。熊大で頼まれたのが「近代再考」といったテーマだったし、大体その線にそって話を集めたので、それにふさうタイトルを平凡社の方で考えてくれることになっている。新書を書いてくれと頼まれてもう何年も経っている。やっと約束が果たされた。

今年はいもう無理にしても、来年出そうと思っている本も何冊かあるが、それらも本に収めていなかったものをまとめる性質のもので、何だか死を前にして店じまいの準備をしているようだ。とにかく谷川道雄先生に死なれたのはこたえた。四月、研究会で気迫に満ちたお話を聞いたばかりなのである。私はむかしから同年輩の友より、五、六歳以上年長の人たちが好きで、ウマが合った。道雄先生は人柄が無条件に魅力的で、しかもお仕事の方向に共感が持て、そして何よりも現実と相渉(あいわた)る学問を希求なさる熱情に、つねに励まされる思いがして来た。もうあの気品あるお姿を見ることがかなわず、哀しい。店じまいなどと言え、先生から軽蔑されるだろう。けなしの気力を絞るしかない。
〔注記〕平凡社新書の拙著は『近代の呪い』というタイトルで刊行された。

●プロフィール
渡辺京二(わたなべ、きやうじ)
文教研主任研究員。
法政大学社会学部卒。
日本近代思想史家。思想家、評論家。あり得(あま)も一つの日本近代を背景にした独自の視点からの日本近代論。近代思想史家として生き、貫して在野の研究者として生きる。
著書『近代以前の日本のイメージを一新させた』(2009年)など多岐にわたる。1999年度第12回和辻哲郎文化賞受賞。

2010年、これまで解明されてこなかった明治維新前夜の北方史を、ロシアと先住民族アラス、日本の三者が持つ異文化接触のエピソードを通して初めて活写した『黒船前夜―ロシア、アラス、日本の三國志』が刊行。大きな注目を集めた。2010年第37回大佛次郎賞を受賞。
河合塾福岡校で1981年より2006年までの25年間現代文科講師をつとめる。
著書『万象の訪れ』『近代の呪い』『もうひとつのこの世』『石牟礼道子の宇宙』『江戸という幻景』『評伝宮崎滔天(新版)』『北輝』『アトリーマンの夢』ほか多数。

中川久定

私にも「年貢の納め時」が近づいている。小学校一年生の頃、大人になったら何になりたいか、と父に聞かれた。私は即座に、「天文学者になりたい」と答えた。原田光夫の2冊の本、すなわち『子供の天文学』と『子供に聞かせる科学の話』(恒文社)を読んだからだった。私は天文学者にはならず、フランス思想史の研究者にはなった。大学一年生の時、私はフランス文学志望の学生数人とよく集まり、ガリ版刷りの同人雑誌『季節』を出すことになった。1950年11月発行の第1号には私の「ある季節の風景」という一文が掲載されている。終始、涙みをきかせた文章の中には、当時の私の内面の空虚さ、あるいは自信のなさが如実に表現されている。ただし、私がそこに引用しているアランのデカルトに関する一句だけは、今もそのままに私のなかに生きていく。『けだし我々のうちには唯一の精神しかなく、またこの精神は自己の中に相異なる諸部分をもつものではない。感覚的な精神が同時に理性的なものであり、すべてその欲望は意志なのである』と。私はその後、これまでアランのこの言葉のように生きてきた、という事実が今、はっきりと気づかされている。フランス18世紀後半の思想史という狭い分野でしか、私はこれまで仕事をしてこなかったが、その研究をまとめた1冊の本『啓蒙の精神 フランスと日本』の中に、私は私自身のすべての感覚性、理性、欲望の三者を投げ入れている。そこで問われているもの、それは当時の知識人たちの実存である。18世紀後半のフランス。神への信仰を擁護するカトリック教徒、それと対抗して、宗教的義務感に近い

感情をこめて、それぞれ自らの反宗教的立場を固守する無神論者と理神論者たち。賭けられるものは、両者それぞれに固有の実存であり、私に問われるものもまた、私の感覚と理性と意志、すなわち大学入学以来絶えず私に問われ続けてきた、私自身の実存、すなわち私の全存在にほかならない。

●プロフィール



中川久定(なかがわひさやす)
文教研主任研究員。
京都大学文学部仏文科卒。
専攻：フランス文学史・思想史。文学博士。

京都大学名誉教授。日本学士院会員。元京都国立博物館館長。元国際高等研究所副所長。元国際18世紀学会副会長。国際18世紀研究センター学術委員(フランス、フェルネ＝ヴォルテール)。研究誌『デイドロ研究』(カナダ)評議委員。18世紀フランス文学・思想の実証的比較分析を行っている。1976年辰野賞(日本フランス語フランス文学会)、1986年バルム・アカデミック勲章オフィシエ級(フランス)、1993年京都新聞文化賞、2001年勲2等瑞宝章、2004年レジオン・ドヌール勲章シュヴアリエ級(フランス)、2007年京都府文化賞特別功労賞受賞。
著書『啓蒙の精神 フランスと日本』『デイドロのセネカ論』『自伝の文学』『甦るルソー』『啓蒙の世紀の光のもと』『転倒の島』『Des Lumières et du comparatisme』『Introduction à la culture japonaise: Essais d'anthropologie réciproque』(フランス語原著に基づくスペイン語版、イタリア語版、ポルトガル語版あり)、[L'image de l'autre vue d'Asie et d'Europe] (éd. par H. Nakagawa et J. Schlobach)、[Mémoires d'un moraliste passable]。S・カルブ編中川久定/増田真監訳『十八世紀研究者の仕事 知的自伝』(河合ブックレット)、J・シュローバ氏との共同編著で18世紀国際シンポジウム論集の日本語訳『18世紀における他者のイメージ』を刊行。

主任・特別研究員の近況

長野 敬



以下の記述は、最近のある研究集会で持ち出された問題を発端としている。(ただし元来の焦点は、差別という人間社会での現象にあり、突っ込んだ議論は別の機会に譲る)。
福島原子力発電所の事故は、いま日本でもっとも深刻、かつ複雑な事態である。指摘の一つとして、周辺に放出された放射性物質の影響(以下、放射能と略称)が容易に回収されず残留して、後継世代に影響を及ぼすことが危惧されている。これは言ってみれば当然のことで、そもそも遺伝子の本体がまだ五里霧中だった時期に、ハーマン・マラーはショウジョウバエへのX線照射実験から、動物への放射能の悪影響を説き、1946年にノーベル賞を得た。人間も動物の仲間だから、放射能による障害児誕生は当然予想される。ところが福島原発反対を訴えながら、次世代への影響を反対の根拠としたがらない立場がある。それを根拠とすると、生まれる子を障害の有無で差別することになるからである。

この立場はじつは放射能の問題に限らない(むしろ先天的なハンデキャップにどう対応するかという、社会システムの設定の問題である)。たとえば21番染色体が通常の本二本でなく三本であるトリソミー(ダウン症)のような軽度～中程度のハンデキャップについては、患者関連の団体も積極的に立場を主張している。国連は3月21日(染色体の「3重化」と21番染色体にちなむ)を2012年からダウン症の国際デーに設定し、障害を差別の根拠にしない姿勢を明確にした。

ハエと同じく人間も、攪乱的な環境などの影響は同じように受けるだろう。そこに二重の基準などはない。しかし影響を受けた個体が不利を蒙る程度は、人間の社会システムでは他の動物の場合と明らかに違う。違いの根拠である広義の共感(sympathy)は、類人猿の遠い祖先から受け継いできたのかもしれないが、宇宙の摂理とか真理が進化を通して必然的に人類に流れ込んできたのではない。望ましい約束ごととして人類社会が自分の社会に仕掛け、定着させた人工基準である。生物学の立場からこのことだけ一言しておく。

●プロフィール

長野 敬(ながの、けい)
文教研主任研究員。
東京大学理学部植物学専攻。専攻：生物学。医学博士。自治医科大学名誉教授。細胞膜のイオン輸送酵素の遺伝子構造を決定し世界の遺伝子研究に先鞭をつける。細胞から生態系まで生物学をシステムの観点から統一的に見る独自の的方法論をとる。現在はこの方法論の延長上で「生命研究を教育の中で多面的に正しく理解させる」ことをテーマに研究中。
著書『生物学の旗手たち』『科学的方法とは何か』『変容する生物学』『進化論のらせん階段』『生体の調節』『生命の起源論争』『生命現象と調節』『細胞のしくみ』『ウィルスのしくみと不思議』、他に共著、翻訳書など多数。

私が考えてきたこと

牧野 剛



私は、子どものときから長らく文学史や民俗学に興味を持ってきた。そして秘かに、歴史と民俗学の合体のようなものを、自分の一生の研究の対象にしようと思ってきた。それにはいくつかの理由がある。
その一つに、小学校に入る前に幼い私に祖母が何度も繰り返して語って聞かせた話がある。この話が私の内なる一つの核を形成し、小学校時代には安田徳太郎の本(「わたしが選んだこの一冊」2013年版参照)を読み続けたことになった。今度はその安田徳太郎の影響で、その後のおびただしい読書の中に柳田国男や宮本常一などの民俗学を讀むという一つの筋ができていった。さらにそこに、学生になってからのさまざまに師との個人的な関係(中川久定氏・故谷川道雄氏・故廣松渉氏・故網野善彦氏など)と若き日の学生運動が、この歴史と民俗学

の合体のうちに物事をみる、あるいは歴史の背後に常に生きて人間生活を捉えようとする私の傾向を決定づけていった。
ここでは、祖母の話について書こう。
子どものとき、毎日、車で車を何時間眺めながら祖母から同じ話を何回も聞いた。それは祖母が実際に目撃したものでなく、彼女の母や祖母の祖母の直接の目撃談として「彼女が伝えた聞いたもの」であった。明治維新の前、大井の宿(注)に、数百人の水戸の浪士が命からがら逃げ込んできたので、憐れんだ大井の宿の人々が彼らに食べ物や水を与えて休ませた。しかし彼らはそこに長く留まることがなく、最後にはアルプスを越えてどこかへ去って行ったという。学歴も知識もない祖母たちは、彼らを「井伊大老」を切った水戸の浪士たちだと信じていて、伝えない細かいエピソードを交えながら私に何度も話したのであった。しかし、長じて、私はそれが桜田門外の変(1860年)より4年あとの「水戸天狗党」の反乱者の浪士であることに思い至った。それで歴史の本や絵を祖母に見せて、彼らは「水戸天狗党の乱」の浪士たちであり、水戸から中山道を下ってきて、最後には敦賀で処刑された(死罪32人、島流し137人、水戸藩渡り130人)ことを示し、この北陸(注)で数百人(女性も数人いた)を越える処刑事件の大きさを示して、桜田門外の変を引き起こした水戸浪士の二十数人ではないことを何度も説明した。しかし、祖母はついに納得しなかった。おそらく無学の祖母は、本の知識による私の整合的な説明よりも、自分が実際に伝えたという経験の深さを信じたのだと思う。この庶民の中に根付い

たものの強固さというものが、私の中にあった感じがたい感覚として残った。
記述された歴史の背後には、自明なことながら、人々が生きた膨大なエピソードが存在する。その奥行きにまで目が届かなければ、歴史は本当には見えないのではないかと考えている。
〔注〕岐阜県恵那市の中仙道大井の宿。祖母の生家はその宿の坂の上の「上宿」。彼らの信奉した水戸学は平田国学の信仰の地が恵那、中津川であった(高崎藩村一夜明け前)。
〔注〕この事件で、水戸藩は明治維新の前に反乱者として数百人の人々を失い、反乱者の手で幕府側の水戸藩の支持者も失ったので、明治政府の中心に人を送ることができなかった。その反省で、次の戦争(太平洋戦争)で水戸から18万人をニューギニア戦線に送ったが、食糧難とマラリア等でほとんど戦線に送らなかった。飢餓のため死んだ戦友を「食った」と、60年目に告白した水戸の老人を、九州のテレビで見たことがある。

●プロフィール

牧野 剛(まきの、つよし)
文教研特別研究員。
名古屋大学文学部国史科卒業。
私塾、養護学校教諭、高等学校教諭などさまざまな教育現場を経て、1976年より河合塾国語科専任講師として予備校の教壇に立つ。元国語科、小論文科主任。1984年の「全国共通一次試験」の国語問題(藤田省三「精神史的考察」を「スバリ」の中、させ、大きな話題になる。その後、東大、京大の出題問題も中させている。2013年より現職。
学生運動・市民運動の中心を担い、社会の矛盾を問いつけてきた姿勢が、その予備校教育に生きており、30年にわたって多くの予備校生、高校生に絶大な支持を得てきた。文教研および大阪校、福岡校、仙台校などを発案し、河合塾の全国体制の基礎作りを貢献。その全国展開に伴って、全国模試の体制、「ベリック(低学力)コース」「コスモ(大検)コース」「サテライト(衛星)授業の設立なども提案、実現してきた。また、日・韓三国大学入試統一テスト比較、カンボジア学校支援も行ってきた。
著書『予備校にあつ』(『偏差値崩壊』)ほか多数。